

日本の海外投資の歩み 1970年代から

○1970年代

1955年～1973年:国内設備投資主導による高度経済成長期

貿易面での対外進出:商品輸出、輸出大国 貿易摩擦 繊維

1970年代の日本企業の海外進出

大幅な円高を背景に海外投資 発展途上国向け:58%、非製造業が67%以上

この時期の海外投資は、資源開発型投資が中心、資源の安定供給

製造業投資:アジアの低賃金を求めて。アジア、中南米の工業化での企業誘致による

本拠地を国内においての企業進出、商社の仲介、先導、金融機能利用

○1980年代

貿易摩擦:鉄鋼・テレビ・工作機械・自動車・VTR・半導体

輸出の自主規制:アメリカ、ヨーロッパ向け、数量監視

現地生産に変わっていく。下請企業の海外進出も始まる、部品生産の拠点作り

銀行や保険も進出をはじめ、日本企業を金融的にバックアップ

企業内国際分業の拡大、国際下請生産

海外投資による輸出の代替:海外への生産拠点の移動

この時期に、発展途上国への海外投資が本格化した

○1990年代

先進諸国が不況期に入った

グローバル化、グローバル・スタンダード:欧米のスタンダード ISO9001、ISO14000

企業の海外投資が停滞し始めたに関わらず、製造業の海外生産比率が増加していく。

日本的経営(終身雇用、年功序列)が影をひそめる。

1993年以降の円高の進行で国際競争力を失った生産部門がアジアへシフトした。

特に、80年代のNIES向けでなく、中国、ASEAN向けに増加

国際分業構造の進化、日本とアジアの分業関係の深まり

現地で生産できない基幹部品や素材を日本から調達する。

垂直分業関係:低・中級品は現地生産で、高級品は日本国内で生産。

○2000年代

水平分業型へ急速に切り替えつつある。

素材から高付加価値品まで幅広い業種に及んでいる。

○今週の「こんな生き方もある」: 漁師になったサーファーの元サラリーマン

○今週のビデオ:NHK-BS「世界潮流2006 シリーズ:激動する世界経済 巨竜と巨象が世界をのみ込む
第1部 飛躍と摩擦 中印パワーの実像に迫る」

参考文献

内田勝敏編『グローバル経済と中小企業』世界思想社、2002年

鈴木茂・大西広・井内尚樹編『中小企業とアジア』昭和堂、1999年

質問・意見等は、高田の E-mail: ystakada@komazawa-u.ac.jp まで。

講義レジュメ、講義スライドの掲載ホームページ: <http://homepage1.nifty.com/ytakada/komadai/kougi/>